

新連載

よみがえる彩色

歓喜院聖天堂

今月から3回に分け、鮮やかに修復された聖天堂の彫刻について、詳しく紹介します。

第3回 聖天堂の彫刻① 二つの鳳凰

聖天堂は、奥殿と拝殿を中殿が結び付ける「**権現造り**」という建築様式を用いており、その三つの建築の各所に、多くの彫刻が施されています。

それらの彫刻は、上州花輪村(現在の群馬県みどり市)の彫刻師であった**石原吟八郎**を中心に制作されたものです。吟八郎は、日光東照宮の修復に参加したほか、北関東を中心とした多くの社寺建築に彫刻を残しています。この吟八郎の名は、江南地域の上新田地区にある、市指定有形文化財「**諏訪神社本殿**」の建築に際しての棟札下書きにも見ることができます。

18世紀中期以降、寺社建築における彫刻と彩色の技

法は、装飾性を含んだ上で進展しており、その流れの中で技術を高めた吟八郎やその弟子たちによって、数多くの聖天堂の彫刻が作られていきました。

その中で、精緻を極めた彫刻の最たる例が、奥殿の外部における南側と北側に施された一対の「**鳳凰**」です。この彫刻は吟八郎の弟子二人によって彫られたものであり、南側を**小沢常信**が、北側を**後藤正綱**が手掛けたとされています。二つの彫刻の作風は異なり、常信作は、彫りの緻密さによって鳳凰の表情に厳しさを与え、正綱作は、大胆な彫りによって表面を立体的に仕立てています。

この二つの彫刻は、今回の保存修理工事において、聖天堂から取り外され、彩色の復元が行われました。再び元の位置に戻った、二つの「鳳凰」。彩色と共によみがえった鋭い眼光からは、彫刻師たちの情熱がうかがえます。



鳳凰(南側)



鳳凰(北側)